

学位論文の要旨

専攻 社会文化学専攻

氏名 グエン ティ ホアイ チャウ 印

1 論文題目

現代ベトナム都市部における祖先祭祀の現状と展開
—ホーチミン市を事例として—

2 論文の要旨

ベトナムにおいては、戦争が多かった独自の歴史の中で、血縁による民族の団結を強化する必要があり、また紀元後2000年以上、儒教を積極的に受容してきた背景があることから、祖先祭祀は重要視されている。従って、ベトナム民族の文化基盤を成す重要な要素の一つとしての祖先祭祀は重要な研究テーマになっている。

本論文は、都市化が進み、祖先祭祀を支える基盤である親族集団等を取り巻く環境が変わりつつある現代ベトナムにおいて、特に儒教との関係で、現在進行しつつある祖先祭祀の変容のあり方を明らかにすることを目的とする。まずは、変容する前の姿を明らかにするために、多くの先行研究に基づきつつ、古いベトナムの祖先祭祀の特徴を明らかにする。従来の研究では、祖先祭祀にみられる双系的特徴が強調されてきたが、その一方で、これまで2000年にわたり、儒教が生活規範として社会に深く根を下ろしてきたベトナムでは、儒教思想を基盤として父系親族集団を中心とする父系社会が形成しているのも事実である。従って、ベトナムの祖先祭祀を検討する上では、儒教が重要なキーワードの一つとなる。

本論文では、今までの先行研究にあまり言及されなかった、儒教の核心となる「孝」原理を表わす父系血縁原理に重点を置き、祖先祭祀のあり方を明らかにする。そして、祖先祭祀の従来のあり方を確認した上で、現代の急激な社会変動の下で、祖先祭祀の変容に注目し、今後の方向性についても論じることを試みる。これは、ベトナムの家族・親族の構造やジェンダーの現状などの社会文化的特質を明らかにする手掛かりを探ろうとする試みでもある。

具体的には、ベトナムの中心的な都市であるホーチミン市において、文化人類学的な調査を実施した。対面的なインタビューのほか、インターネットや電話による聞き取り、各種儀礼への参与観察を行った。調査地においては、祖先の祭壇や墓という祭祀空間を通じて、祖先祭祀の儀礼を考察した。

その結果、これまでの先行研究で確認されたとおり、祖先祭祀の儀礼においては、男女間の区別は存在するとしても、目立たないものであった。つまり、儒教に基づく単系的な父系出自原理は儀礼上は明確に示されない。しかしながら、原則として祀られる祖先はもっぱら父系祖先に限定され、夫方祖先の祭祀の担い手を父系による単系出自集団に限定していること、また血族の祖先祭祀の忌祭等を実践する面における女性の嫁/娘としての役割の差異が大きいことからみると、単系的な父系出自原理が強調されていることは間違いない。

特に、祖先祭祀の父系血縁原理に重点を置き、具体的な事例を通じて祖先祭祀を検討したとき、婚入した女性に対して、夫方親族の血縁・祖先祭祀の跡継ぎである男児を産む圧力が激しくかけられることは明らかである。このような男児選好による女兒差別や女兒中絶率が顕著であることも注目に値する。この結果、世界的にも問題にされるほどの深刻な出生性比の不均衡はもたらされている。つまり、儒教的父系血縁原理に基づく儒教式祖先祭祀を永続的に守り、男系の血筋を絶やさないため息子が必要であるという認識は今も色濃く残っていることが見て取れる。

しかし、祖先祭祀は従来支配的な社会理念であった儒教倫理がある面で、根強い伝統として保たれながらも、他方で、祖先祭祀は部分的に大きく変容している実状がある。例えば、祭祀空間として墓から納骨堂等に変わること、それとともに仏教の関与が大きくなるという仏教化や核家族化の進展に伴い、祖先祭祀が簡素化されることにより、祖先祭祀の場所ややり方等に大きな変容が引き起こされていることは確認された。さらに、これまで男系ラインを中心にする儒教規範により不利益をこうむってきた女性たちの側から抵抗が示され、政府もさまざまな政策を打ち出す中で、祖先祭祀の本質とされる「孝」と結びつく儒教的父系血縁原理における「双系化」という新たな質的变化が生まれつつある点は注目されるべきである。この点も、今まで、父系血縁原理を核心とされる儒教に基づき、家系を父系で辿っているベトナム社会においては、大きな変容を提示しているといえるだろう。この意味では、これらの変容は今後祖先祭祀のゆくえを論じるのには大きな意味を持ち得ると考えられる。